談話

一年中で最も寒い時節になりました。ストーブや火鉢を圍んでのお話に身も心も充分あたゝめませう。

「節分の話」 幼稚園談話集第二輯に載せるお話です。節分の夜の事、お母さんが七輪に火を起して豆を煎りました。だん〳〵熱くなりますと、其の中から炭のかけらと一粒の豆が怪へきれず飛び出してしまひました。一緒に炭取のかげに隱れて息をついて居ますと奥の方から面白い歌が聞えて來ました。耳をすまして聽いてゐると、福は内鬼は外と賑かにいひ乍ら此の家のこども達が豆を撒いてゐるのです。豆と炭は大層面白さうな樣子を不思議に思つて尙も熱心に聽いて居ると、奥の方から福の神の裝ひをした此の家のお父さんが「鬼を追ひ出した太郎さんには何をあげませう、花子さんには何をあげませう」とおつしやり乍ら出ておいでになり、其の望みのものを袋から出して下さいました。豆と炭は「あゝ今夜は節分の豆撒きですね、それで鬼を追ひ出して福の神を呼び入れてゐたのですね」と語り合ひ乍ら、又もとの炭取のかげに隱れた、といふお話です。節分の夜の有樣と其の樂しさがよく描かれてゐます。豆と炭が飛び出して其の樣子を逐一見物してゐるといふ着想が大變面白く感ぜられます。此の頃福の面や鬼の面等を作る事でせうが、夫れ等と相俟ち、こども達に昨年の節分の有樣を想起させ又今年の夫れに興味を持たせる樣環境を整へて聽かせたいものです。最近は物資不足の爲、かうした古式ゆかしい行事が簡略になり、又すたれたりいたします。大事な食料品である豆をみだりに撒くのは勿體ないことで如何かと存じますが、少い配給の豆も何とか都合して此のゆかしい行事の氣分だけでも味はゝせ度いと存じます。

「熊太郎」 雪國の山中での出來事です。親熊が病氣になり、食慾が一寸もなくなりました。熊太郎の懸命の看病の甲斐もなくだん〳〵弱つてゆきます。其の中ふと、「お刺身が食べたいが此の寒中では駄目だらうね。」と親熊がいひ出しました。熊太郎は其を聞いて非常に喜び、すぐさま何時も釣をする池に飛んでゆきました。所が、一面の厚い〳〵氷、而も其の上には雪が積つてゐます。熊太郎は大急ぎで松の木の枝で雪を拂ひのけ、大きな石を力一杯ぶつつけて氷を割らうと致しました。所が、石はカチン、カラ〳〵カラ〳〵と走つてびくとも致しません。何度繰返しても同じ事です。熊太郎は困りましたが親熊を治したい一心で、いろ〳〵考へた末、自分の溫かい身體で氷を溶かさうと決心致しました。軈て一念が徹つて氷が少し溶けかゝりましたので、熊太郎は今度こそ、と力をこめて石をぶつつけ氷を割つて遂に大きな鯉を釣り上げました。其のお刺身を食べてから親熊は急に力が湧き出し、遂々全快して又もとの樣に親子仲よく暮したといふ誠に涙ぐましいお話です。之は新しい談話集に載せるものであります。二十四孝にでもヒントを得たお話でせうが、子熊の孝心、機智、躍如たるものです。親熊はどうなるか、子熊は親熊の望みを叶へる事が出來るか、興味は此の點に集中し終りまでぐん〳〵惹きつけられま

安村ふさ

す。子熊の孝心あふるゝ行動は子ども達にきつと強い感動を起させる事でせう。私達は子熊の心事に同情し、その氣持になりきつてお話致しませう。誠心は自づと其の中にこめられ、話しぶりも緩急よろしきを得て一層の感動を與へるに違ひありません。

「笑ひ話」 牛と狐が宿屋に泊り、翌朝出立の時宿屋の人に又どうぞと云はれて、モウコン、と答へた等の二三の笑ひ話を新しい談話集に擧げてみました。かうした種類の簡單なものはこども達も良く知つて居ります。そして是等を話させる事はこども達の發表力を養ふ上に效果があります。氣が小さくて大勢の前では中々發表しない子どもも、二三笑ひ話を聞かせると元氣に手を擧げて話したがります。談話は保姆が一方的に語り聽かせる許りでなく、こども達の方からも話させるものだといふ建前から、笑ひ話等はその入門として丁度よろしいと思ひます。又、**なぞ〳〵**もかうした目的の爲に都合のよいものです。こども達ははじめはなぞなぞとして良く知られてゐるものを發表しますが、其の中に自分で考へたものを發表する樣になります。夫れは始めは不完全であつても、相手に分らせる爲にはそものゝ特徴を充分捉へねばなりませんので、さうした物の見方を養ふ上にもよろしい樣に思はれます。

「お天陽樣と風の力くらべ」 有名なイソップの寓話。之は述べるまでもなく、旅人の外套を脱がす事について、太陽と北風が競爭したお話です。イソップの寓話は簡潔、直截で、私達の感情にぢかに訴へる爲、尊ばれて居ります。此の寓話に含まれてゐる教訓は、風の身の程知らずでせうが、だからといつて風は愚かだと感じさせるより、何かほゝゑましいものを與へます。風が眞赤になつてふう〳〵吹いてゐる所を想像致しませう、そのあとで、お日樣がニコ〳〵なさる所を心に描きませう、何だか身體までもあたゝかくほか〳〵する樣なお話です、淡い乍らもお日樣の偉さに對する今更ながらの驚きが心のどこかに殘つてゐて。

手技

及川ふみ

前月號に幼兒たちに出來る模樣かきについて、その模樣の材料の實際の取扱ひ方を述べたのであるが、それに續いて模樣の單位となる材料について考へて見たい。

模樣の單位はやはり幼兒たちの親しみの深いもの、又興味の多いものがよいのは云ふまでもない。又季節のものといふ事も考へられる。みかん、はね、風船、なんてん、など二月の季節の材料として選ばれてよいものであらう。又最も幼兒たちに親しみの深い動物類や、おもちやはいつの季節でもよいものである。

飛行機、お人形、戰車、軍艦など、もつとも幼兒たちの喜ぶものであらう。

模樣の單位を作るのには始めは平面的のものがよい。形の單位が大體同じ型であるのが模樣であるから、木の葉などの如く平面的の材料である場合は最初の時には實物をそのまゝ引き寫しをさせると幼兒たちは大喜びで手輕にするのである。立體的の木の實やおもちやなどは平面のものゝ樣に實物をそのまゝにしき寫しが